

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

常任委員長 岡本 美穂

先日の大会で、大分の丸小野先生がこんな言葉を教えてくれました。「最近の教育は『改善』ではなく、『改革』ばかり取り上げている。」その代表といえるのではないかと感じた、工藤勇一氏のインタビュー記事が載っていたので紹介します。

「分かっている人にとって」宿題は

無駄な作業

全国津々浦々、どの学校でも宿題が出されています。その目的は何かと問われれば、多くの学校関係者や保護者は、「子どもの学力を高めること」「学習習慣を付けること」と答えると思います。しかし、本当にその目的は達成されているのでしょうか。自ら学習に向かう力を付けて、学力を高めていくには、自分が「分からない」問題を「分かる」ようにする。プロセスが必要ですが、多くの宿題においては、そのことが欠

けています。すでに分かっている生徒にとっては、宿題は無駄な作業で、分からない生徒にとっては重荷になっているように思えます。宿題を出すのであれば教師は、「分からないところをやっておいで」と声掛けしなければいけないはず。」

宿題は、できる子どもだけに焦点をあててしまうと、なくてもよい作業となってしまうのでしよう。また、工藤氏が勤めておられる中学校にとっては、そのように考えることも自然なのかもしれません。

しかし小学校では、「どの子どもも伸ばす格差を埋めていく」うえで宿題によって救われる子どもは必ずあります。みんなを取り組むということが、とても大切なポイントであり、その部分を大事にしていくと、宿題には可能性があふれていることがわかるはず。しかし、この記事だけを読んだ先生方が共感し「宿題をなくす」という部

分だけを取り上げたところで、まったく意味はなさないでしょう。それは実践に心がないからです。

私が今回取り上げたいことは2つあります。1つ目は、学力研として宿題をどう考えるか。2つ目は、言葉に振り回される教育の危険性を知ろう、ということ。です。

◆2学期からの宿題どうする？

久保先生の言葉で「教育的効率」というものがあります。時間をかける部分を間違えてはいけないということ。つまり、時間のかけ方を見極めて、目の前の子どもたちに必要なこと、意味のあることを求めて実践していこうということ。です。

ここでの本場に大事なことは、宿題を出す、出さないということ議論することはありません。宿題で「どのような力を育成していくのか？」ということを職員で考えることです。しかし、今そういうことについて真剣に見直しをもって考えている先生方が少なくなってきたのが現実ではないでしょうか。実践を見直すよりも去年通りで、となってしまうのが現実で

す。なぜなら、宿題なんて「保護者から文句が出にくい」もので十分で、内容について「考える時間が無駄」だと思われるからです。

◆宿題プリントを全校で

最初は久保先生の「手作り宿題」の追実践から始めました。そしてそこから同僚と相談しながらアレンジして作っていきましました。今では全校でこの宿題プリントを作っている行っています。表は志水廣先生の「どの子ものびるプリント集」を参考にしながら計算中心の学習、裏は一問一答式の国語の読解問題と漢字練習を印刷しています。つまり一日一枚で宿題が終わるようにすることで、保護者の方々もチェックしやすいという良さもあります。また、できる限り自分の力で取り組むことができるようにも工夫をしました。これをするだけで、「基礎学力」は定着しやすくなります。実際、おとしの六年生、去年度の三年生での標準学力テストでは結果が出ました。

◆言葉に振り回される教育

ある出版社の方が、一年を通してネットで見学が検索される言葉の一位は「組体操」2位は「ダンス」3位は「レクリエーション」だと教えて下さいました。これを聞いてみなさんは、どう思われますか。私は情けないと同時に「危機感」すら感じました。以前は研究授業の指導案をそのままコピーしていることが問題になっていたのですが、もしかしたらそれはまだ、まだだったのかもしれませんが、今以上に「見栄え」重視になっているのだと感じたので

す。
教師歴13年目を迎えると、たくさんの方々が私の前を通ってどこかに行きました。学力研で学ぶことはないと思つたのでしよう。また、ちよつとネットで検索すれば資料はたくさん出てくる時代。そんな時に「見栄え」のしない教育はやりません。ただ、変わらないこともあります。それはいつの時代も「良い学級」にしたいと先生方は思っているということです。ただし、これは教師の課題であることはもちろんですが、子どもの課題でもあります。では、「良い学級」にするためには、何が必要な

のでしょうか。それは、自分たちで良い学級にしていこうという「共通認識」です。学校というのは、授業が核になる場所であり、教師が学力をつけることに本気でこだわること、子どもたちは自信を持ってキラキラ輝きだして、落ち着いて授業に参加するようにするのはないでしょうか。「自ら学んでいる」と感じている子どもはキラキラしています。そしてその輝きがほかの子どもたちの喜びとなり、「良い学級」とじわじわなっていくのです。

子どもというのは「はまりやすく、あきやすい」ものです。例えば国語の授業一つでも、子どもが、筆者の説明について自ら問いをもち、言葉に何度も立ち返りながら、友だちと一緒にその意味を追究するような授業を目指していきたいものです。最初は気付かなかつたけれど、繰り返し文章を読んだり、仲間と話し合ったりしていくことで、筆者の説明の工夫がたくさん見つかった、という経験をたくさん味わえるようにしていくのです。そんな泥臭い、見栄えはしないけど、力の付く授業を2学期は追い求めていきませんか。